

「生きる力」の育成という観点からみた小学生の宿泊型集団活動と学校体育の相補的關係について

Complementary relationship between lodging-type group activities of elementary schoolchildren and school gymnastics from a viewpoint of getting of “the zest for living”

体育学部体育学科

山本 泰明

YAMAMOTO, Yasuaki

Department of Physical Education

Faculty of Physical Education

キーワード：生きる力，学習指導要領，宿泊型集団活動，学校体育，相補的關係

Abstract : The government curriculum guidelines for elementary school indicate the necessity for zest for living. The purpose of this study was to clarify how this was achieved at a sports camp, which aims to foster participation in sports for elementary school children. It was clear from questionnaires that children, the coaching staff and parents that they all wished for children to encouraged to have a the zest for living in all the activities including experience of sports. Furthermore, it was clear that the children experienced the zest for living by exchanging with children of different ages, and also with or adults. Since fundamental capability is supported in school gymnastics, the characteristic of these camps is useful. It is necessary to complement relations between the camp of non-every day and everyday school gymnastics.

Keywords : the zest for living, the government curriculum guidelines, lodging-type group activities, school gymnastics, Complementary relationship

I. 研究の目的

1. 学習指導要領が中心的課題として掲げる「生きる力」について

現代の日本社会について、「閉塞感が漂う生きにくい社会」といった表現を諸所でされるようになって久しい。そのような社会で力強く幸せに生きていくために必要な力として、人間力（内閣府人間力戦略研究会）、社会人基礎力（経済産業省）、PISA型学力（OECD経済協力開発機構）といった力の育成が各界で提言されている。

教育界も例外ではない。近年、教育基本法の60年ぶり改正（2006）、学校教育法の一部改正（2007）があったが、その前後を通じて教育界でキーワードとなってきた言葉が「生きる力」である。

「生きる力」という言葉が初めて明示されたのは、1996中央教育審議会「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」である。その中で、「我々はこれ

からの子供たちに必要となるのは、いかに社会が変化しようと、自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力であり、また、自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心など、豊かな人間性であると考えた。たくましく生きるための健康や体力が不可欠であることは言うまでもない。我々は、こうした資質や能力を、変化の激しいこれからの社会を「生きる力」と称することとし、これらをバランスよくはぐくんでいくことが重要である」と提言している。また「生きる力」を育むためには、子どもたちに時間的、精神的なゆとりを確保し、家庭や地域社会と連携を図りながら、生活体験や自然体験の機会を増やす必要があることが示された。

これを受けた1998学習指導要領では、要領として初めて「生きる力」が明示され、ゆとりの中で「生きる力」を育むことの必要性和具体的方策が示された。特徴的な試みとして、ゆとりを生かす理念の実現を目指

して、新たに「総合的な学習の時間」が創設された。この時間は、科目の枠組みを超えた横断的な学習テーマの中で、児童の興味・関心を引き出すような創意工夫を生かした教育活動を行うこととした。このような理念のもと1998学習指導要領は施行されたが、授業時間、授業内容の削減による学力低下が「ゆとり教育」と表現されて社会問題になったうえ、新しくスタートした「総合的な学習の時間」も現場教師の多忙さや生徒の基礎知識不足のため、理念通りに順調に機能し始めたとは言い難かった。しかし、「生きる力」を育むという要領の趣旨が否定されるものではなかった。

その課題を受けた2008学習指導要領では、その解説編で「新しい知識・情報・技術が政治・経済・文化をはじめ社会のあらゆる領域での活動の基盤として飛躍的に重要性を増す、いわゆる「知識基盤社会」においては、「確かな学力、豊かな心、健やかな体の調和を重視する「生きる力」をはぐくむことがますます重要になっている」と示されている。つまり、1998学習指導要領で示した「生きる力」の必要性は継続され、むしろ強調されている。具体的には、言語活動や体験活動等を充実させた授業の実現に努めることで、「生きる力」を一人一人の児童生徒に育てていきたいとしている。

このように、1996中央教育審議会第1次答申以降、2008学習指導要領が効力を持つ現在に至るまで、「生きる力」という言葉が教育界におけるキーワードとなってきた。今後も、生きる力を育むとテーマに対して、学校、家庭、地域社会がどのように連携して取り組み具体的な成果を挙げていくかということが課題であるといえよう。

2. 体育科教育におけるアカウンタビリティについて

一方、社会各界で近年よく用いられる別のキーワードとして、アカウンタビリティ（説明責任）がある。教育界も例外ではなく、学校教育でどんな力を身につけさせるのかということを、生徒・学生、保護者、地域社会等に対して説明責任を果たすことが求められている。時代や社会の要請に応じて約10年に一回改訂される学習指導要領においても、特に2008学習指導要領はアカウンタビリティを強く意識した内容表現になっている。

体育科も例外ではない。近年の体育科教育学会でも、体育で何を教えるのかということに対する議論が繰り返されている。楽しいだけの体育授業では、子どもたちに身につけさせる力について責任を果たしている

とはいえない。子どもの体力は低下してきているとする調査も多い。体育科は一般的な受験科目でもない。そんな中で体育科のアカウンタビリティが問われるということは、体育科の授業でどんな力を育成するのか、そのためにどんな授業をするのか、それが「生きる力」にどうつながるのかといった、体育科の存在意義が問われているといってもよい。

2008小学校学習指導要領では、体育科を「心と体を一体としてとらえ、適切な運動の経験と健康・安全についての理解を通して、生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の基礎を育てるとともに健康の保持増進と体力の向上を図り、楽しく明るい生活を営む態度を育てる」科目と位置づけ、「指導内容の系統化・明確化」および「体力向上の重視」という責任を明確にした。具体的には、体づくり運動、器械運動系、陸上運動系、水泳系、ボール運動系、表現運動系の6つの運動領域について、子どもに身につけさせたい基礎的な運動技術の内容を、発達段階に応じて明確に示した。

生きる力を育成する体育授業という観点から、授業研究成果が蓄積されている。岡本ら（2004）は、走り幅跳びを題材にした体育授業で、生徒同士の助言を活性化することによって、自ら学び、自ら考える授業に近付けると結論付けた。また、各地域の授業研究会においては、現場教員による「生きる力」をテーマにした体育授業の実践報告について議論が深められている。これらを総括すると、体育科特有の身体活動と、他者とのコミュニケーションのための言語活動について適切なバランスをとること、言語活動の内容を工夫すること、基礎的な技術・体力の向上させることが、体育授業で「生きる力」を育成するための重要な鍵となっていることがわかる。

「生きる力」を育成するという点で、体育科の担う役割は大きい。2002中央教育審議会答申において、「体力は、人間の活動の源であり、健康の維持のほか、意欲や気力といった精神面の充実に大きく関わっており、豊かな人間性や自ら学び自ら考える力といった「生きる力」の重要な要素となるものである」と示されている。しかし、学習指導要領の理念を推進する役割は、学校教育だけで担うべきものではない。要領にも示されているように、家庭や地域社会など、外部の力も有効に活用していくことが不可欠である。

3. 「生きる力」の育成に貢献する民間企業の活動について

「生きる力」の育成と地域連携という観点から、2008中央教育審議会答申では「体験活動は、学期中や長期休業期間中に一定期間（例えば、1週間（5日間）程度）にわたって行うことにより、一層意義が深まるとともに、高い教育効果が期待される」「社会教育施設や関係団体、企業、自治会等との連携を日頃から図ることが必要である」と、小学校で「集団宿泊活動」を推進することの重要性が提言されている。

また小学校学習指導要領解説特別活動編では、「望ましい人間関係を築く態度の形成などの教育的意義が一層深まるとともに、高い教育効果が期待されることなどから、学校の実態や児童の発達の段階を考慮しつつ、一定期間（たとえば1週間（5日間程度））にわたって行うことが望まれる」と示されている。

しかし現状では、学校教員が中心になって長期宿泊研修を行うことは、時間的、人間的な負担が大きく、実現は容易ではない。そこで文部科学省は、2008年から「青少年体験活動総合プラン」を掲げ、自然体験活動指導者養成事業を進めている。自然体験活動全体指導者2万人、補助指導者8万人、合計10万人の育成を目指している。2012年度からは、全国の小学校5年生約120万人が1週間の集団宿泊・自然体験活動ができる体制を作ることを目指している。

これらの施策に加え、学習指導要領の理念を実現するためには、民間企業の力を活用することも有効である。1996中央教育審議会答申「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」では、「子供たちが異年齢の人々と交流し、適切なリーダーから指導を受けられるようなスポーツ活動の拠点」の必要性和、「従来の学校・家庭・地縁的な地域社会とは違う「第4の領域」」として「今後は、民間教育事業者による、子供たちを対象にした、文化・スポーツ活動や自然体験などの体験活動等の取組も期待し、これらとの適切な連携を図っていくこと」の必要性が提言されている。

以前から、各地域の民間企業、NPO法人、各種任意団体が宿泊型体験活動を実践し、様々な成果を挙げてきた。民間企業等のこういった活動は、「生きる力」を育成するという学習指導要領の理念の実現のために、現実には大きな役割を果たしていることが考えられる。今後、民間企業等が実践している内容、成果を明示した知見を蓄積していくことは、「生きる力」を育成するという学習指導要領の理念の実現のためには大きな意義があると考えられる。

4. 本研究の目的

本研究では、民間企業が小学生を対象に実施した、スポーツ体験をテーマにした宿泊型集団活動の成果に着目し、学習指導要領にある「生きる力」の育成という理念を念頭としたときに、宿泊型集団活動と学校体育のそれぞれが担うべき役割とその両者の関係性について明らかにすることを目的とする。

II. 方法

1. 調査対象

2011年8月に実施された「キッズ・スポーツ体験キャンプ」の参加小学生68名とその保護者、学生スタッフとして協力した大学生18名に対し、キャンプ終了後に郵送による任意のアンケート調査を実施した。子どもおよびその保護者からそれぞれ68名中27名（39.7%）、大学生からは18名中15名（83.3%）の回答を得た。

2. 事業概要

本事業「キッズ・スポーツ体験キャンプ」は、アスリートおよびスポーツ文化人のマネジメントならびにサポートを業とする株式会社RIGHTSが、その人材、人脈を生かして、小学生を対象に毎年夏に実施している3泊4日のキャンプである。2004年に第1回を行い2011年まで8年間継続されている。概要を表1に示す。

表1. 開催概要

趣 旨	子どもたちがトップアスリートや指導者とふれあい、スポーツを中心に多種多様な体験をすることで、スポーツや体を動かすことが好きになるキッカケをつくるとともに、“がんばる”気持ち、“相手を思いやる”気持ち、“仲間と協力する”ことの大切さ等を学ぶ。 守るべき、4つの約束を明示している。 1. 自分のことは自分でやる 2. 友達を思いやり、友達を応援する 3. 大きな声で返事、あいさつをする 4. ルールやマナーを大切にする
講 師	有森裕子（マラソン）／宇津木妙子（ソフトボール）／佐藤真海（陸上）原田裕花（バスケットボール）／ファジアーノ岡山（サッカー）
対 象	小学校1～6年生男女 68名
日 程	2011年8月9日（火）～12日（金）
宿泊会場	岡山県青年館
活動場所	就実大学体育館、グラウンド
主 催	キッズスポーツキャンプ委員会
協賛・協力企業	岡山県内企業15社
スタッフ	株式会社RIGHTS関係者 大学生スタッフ18名（就実大学、倉敷芸術大学、環太平洋大学）
子ども参加費	42,000円／人（3泊4日）

本キャンプの一番の特徴は、株式会社RIGHTSが本業の人脈を生かして講師を依頼し、知名度の高いアスリート、指導者が講師を担当していることである。

しかし、本事業の収支は決して潤沢ではない。個人参加費である42,000円（3泊4日）と、協賛・協力企業からの協賛金、協力物資（飲料、道具、施設等）で成立しているが、本事業としての儲けはなく、株式会社RIGHTSが社会貢献的事業の一環として実施しているものである。

一方、募集定員は開始後1週間で埋まり、その後もキャンセル待ちが100名以上になるという。人手が不足している、収益性が低いという理由から、以前は年3回程度実施していた本事業も現在は年1回の開催にとどまっているが、潜在的期待からすると、このような事業が今後大いに発展していく可能性があるだろう。

次に、参加者構成を表2に示す。

表2. 参加者構成

学年	男子 (人)	女子 (人)	合計 (人 (%))
1年生	4	0	4 (5.9)
2年生	5	2	7 (10.3)
3年生	10	3	13 (19.1)
4年生	8	6	14 (20.6)
5年生	11	3	14 (20.6)
6年生	11	5	16 (23.5)
合計	49 (72.1%)	19 (27.9%)	68

学年別でみると、やや高学年が多いが、ほぼまんべんなく分布していた。男女比では、2.5：1の比率で男子児童のほうが多かった。キャンプ期間中は、これら参加者を4～5人の14グループに分け、グループ単位を基本に各プログラムに取り組んだ。グループ内の学年構成は、上級生から下級生まで均等に分布していた。各グループには、1名のスタッフ大学生がグループリーダーとして付き、グループ活動をサポートした。

子どもたちにとっての大学生スタッフの存在の影響は大きいが、大学生としても子どもたちとの関わりあいから学ぶことが非常に大きい。子ども向けキャンプに大学生がスタッフとして参加することによる大学生の学びの場としての可能性については、また別の機会に探りたい。

次に、3泊4日のキャンププログラムを示す。

表3. プログラム

8/9 (火) 1日目	13:00 開校式 14:30 授業：フラグフットボール (講師：有森裕子) 17:30 入浴 18:30 夕食 19:30 レクリエーション 21:00 就寝
8/10 (水) 2日目	6:00 起床 6:30 体操 7:00 朝食 9:00 授業：サッカー (講師：ファジアーノ岡山) 12:30 昼食 13:30 授業：バスケットボール (講師：原田裕花) 17:30 入浴 18:30 夕食 19:30 レクリエーション 21:00 就寝
8/11 (木) 3日目	6:00 起床 6:30 体操 7:00 朝食 9:00 授業：サッカー (講師：宇津木妙子) 12:00 昼食 13:00 お話会「被災地へメッセージを送ろう！」 (講師：佐藤真海) 17:00 バーベキュー 20:00 入浴 21:00 就寝
8/12 (金) 4日目	6:00 起床 6:30 体操 7:00 朝食 9:00 授業：陸上 (講師：有森裕子、佐藤真海) 12:00 昼食 12:15 保護者セミナー (講師：有森裕子、佐藤真海) 13:30 閉校式

3. 調査項目

子ども、保護者へのアンケート質問項目は、以下のとおりである。各質問には、自由記述欄を設けた。

○子どもへの質問

問1：楽しかったですか。

問2：また参加したいですか。

問3：約束1「自分のことは自分でやる」について頑張りましたか。

問4：約束2「友達を思いやる、応援する」について頑張りましたか。

問5：約束3「大きな声で返事、あいさつをする」について頑張りましたか。

問6：約束4「ルールやマナーを大切にする」について頑張りましたか。

○保護者アンケート

問1：子どもにとって有意義だったと思いますか。

問2：参加前と比べて変化があったと思いますか。

また学生スタッフに対しては、子どもたちを観察するという観点から、自由記述式の任意のアンケート調査を実施した。

○学生スタッフアンケート

問1：キャンプを通しての様々な気づき、その他感じたこと、考えたことを自由に記述してください。

また、筆者もキャンプの実施状況を随時観察した。

Ⅲ. 結果・考察

1. 子どものアンケートの結果について

まず、子どものアンケート結果から考察する。

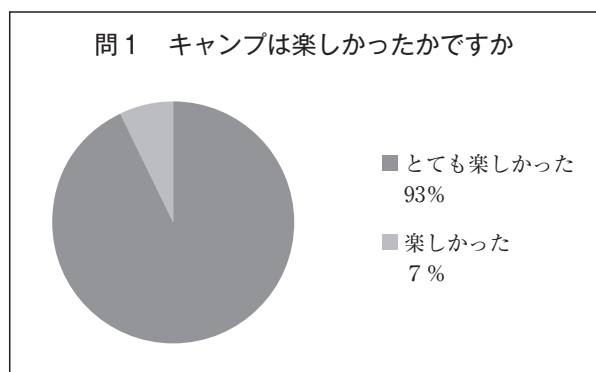


図1. キャンプは楽しかったか

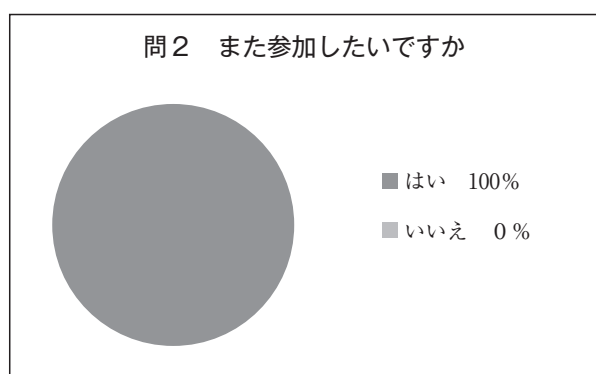


図2. また参加したいか

自由記入欄

- いろいろなスポーツができた。初めてのスポーツも楽しかった。
- 初対面の人ともすぐに仲良くなれた。みんなと話をして楽しかった。
- 大学生がおもしろかった。

- グループみんなでがんばれた。
- 尊敬する先生にアドバイスしてもらえた。

キャンプ全体に対して、回答した子どもたち全員から肯定的な回答が得られた。スポーツ体験に関する好感と、子どもたち同士、講師、大学生との関わりに関して肯定的な感想が多く挙がった。

以下、キャンプ中の4つの約束についての回答をみる。

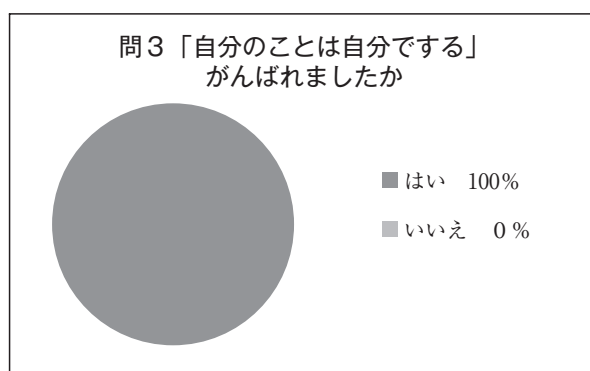


図3. 「自分のことは自分です」

自由記入欄

- 食事の片づけ、布団敷きが自分でできた。
- 次の日の準備を自分でまとめられた。
- 荷物は自分で持てた。
- お風呂にいく準備が自分でできた。
- ごみを自分で捨てた。

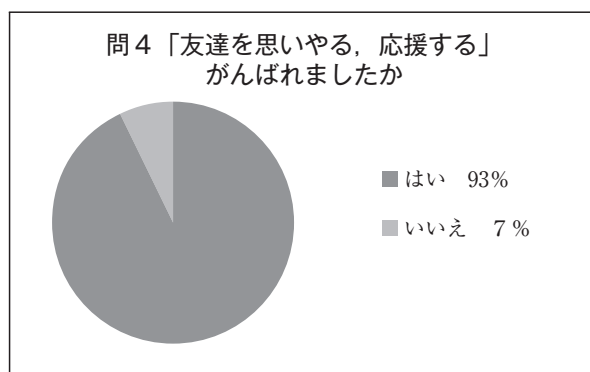


図4. 「思いやる、応援する」

自由記入欄

- リレーのとき、友達を応援できた。
- 他のチームも応援した。
- 1年生の面倒を見た。

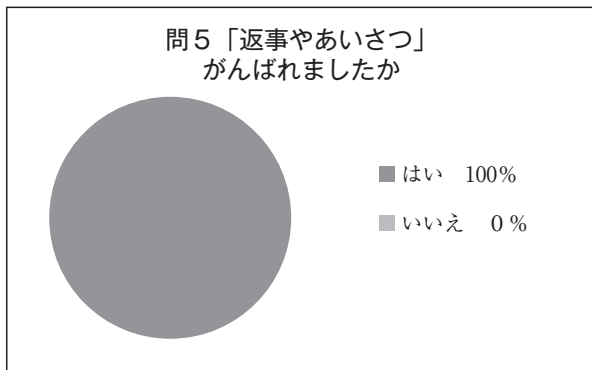


図5.「返事、あいさつ」

自由記入欄

- バスに乗るとき「ありがとう」が大きな声で言えた。
- 先生の言ったことに「はい！」と大きな声で返事ができた。
- 朝、いろんな人にあいさつした。返事も返ってきた。
- 自己紹介を頑張った。
- 朝の体操の時「1, 2, 3」と大きな声でかけ声を出した。

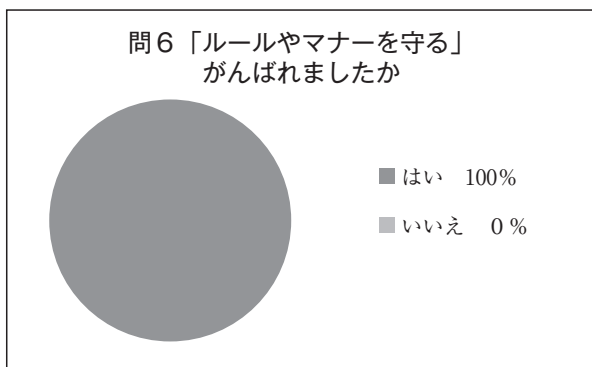


図6.「ルールやマナー」

自由記入欄

- ごみ捨ての方法を守った。
- すぐに集合し、時間を守った。
- 靴のかかとを踏まなかった。靴をそろえた。
- スポーツにおけるルールを守った。
- 食事時のマナーを守った。

4つすべての項目内容について、子どもたちがキャンプを通して常に意識して活動していた様子がうかがえる。また筆者も観察していて、4つの目標について講師が度々子どもたちに問いかけていた様子や、学生スタッフが子どもたちにより近い立場で随時意識付けしていた様子を目にした。4つの項目はどれも「生きる力」に通じるものである。キャンプ中のその徹底の

仕方には、キャンプを通じて4つの項目内容についての力を身につけてほしいというキャンプスタッフ共通の強い思いが感じられた。

2. 保護者アンケートの結果について

次に、保護者対象のアンケート結果から考察する。

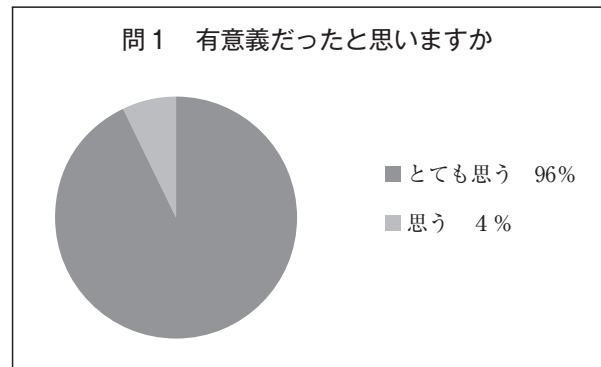


図7. 有意義だったか

- 異年齢の子どもたちとの共同生活の中で、低学年の世話をするというリーダーシップが体験できた。
- 初めて会う子どもたちと友だちになる経験ができた。
- 親元を離れて過ごす体験ができた。
- 礼儀を学んだ。
- ルールやマナーについて学べた。
- 自分のことは自分でする意識を持って行動できた。
- 楽しいことばかりではなかったようだが、それもよい経験だと思う。
- スポーツ以外の経験が大きかった。
- 大学生のお兄さん、お姉さんとの交流がよかった。
- トップ選手や指導者による、緊張感とメッセージ性のある指導がよかった。

保護者が有意義だと感じることは、スポーツ体験そのものよりも、初対面の異年齢の子どもたちとの交流、講師や大学生との交流の中で経験する様々なことに対してであることがよくわかる。実際、キャンプ中はスポーツ活動だけではなく、東日本大震災の被災地にメッセージを送る手紙を書く、バーベキューをするなど、スポーツ以外のあらゆる活動において、子ども同士の多様な関係性や大人とのたくさんの関わりあいが見受けられた。

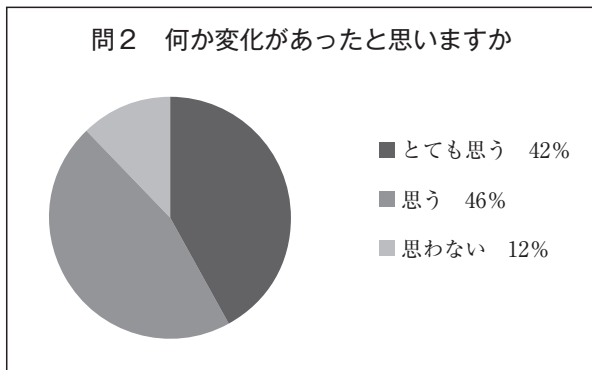


図8. 子どもたちは変化があったか

「とても思う」「思う」

- 初めてのことに對して消極的だったが、「やってみると楽しい」と体感できたのか、積極性が出てきた。
- 一人で寝るようになった。
- 人前でも堂々と話せるようになった。
- あいさつの声が大きくなった。積極的にあいさつできるようになった。
- 自信がついたようだ。
- 小さい子への声かけが増えた。
- 靴のかかとを踏まなくなった。靴の向きをそろえるようになった。
- 人の話を聞くようになった。

「思わない」

- 今の時点ではわからない。

これらは保護者の評価なので、子どもの変化に対する親の期待が重なっていることが想定される。「とても思う」という評価が多いが、「思う」という評価も同程度に多く、「キャンプで変化したところをみつきたい」、「そう劇的には変わらないだろうが変化してほしい」という親心が現れている割合だと考える。一方、「思わない」という意見は、3泊4日ではすぐには変わらないが、ある程度月日が過ぎたときには以前と比べて大きく変化したと認知できるという冷静な見方を示していると考ええる。

3. 大学生アンケート結果について

次に、学生スタッフ対象のアンケート結果から考察する。

「問1：キャンプを通しての気づきについて」

(自由記述)

- グループ対抗リレーで、子どもたちは他のチーム

の応援もして、キャンプ全体を盛り上げてくれた。

- 長男や長女は、小さい子の面倒をよく見てくれる。
- 4日間でも、子どもたちは驚くほど成長する。変わろうと努力していた。子どもの成長を見られることはうれしい。
- 子どもたちの一生懸命さを引き出す工夫をした。
- 褒める場面と叱る場面の工夫が難しかった。
- 学校ではない場だからこそ、子どもたちも楽しいのだと思った。
- 子どもたちも成長するが、私たちも一成長できる場だった。人生観が変わった。

大学生は子どもたちと一緒に活動する場面が多く、より身近な立場から子どもたちを観察していた。キャンプを通しての4つの約束の意識付けという観点から、子どもたちの行動の変化を確実に実感している感想が多かった。このことは、3泊4日という短い期間において、子どもたちの行動が確実に変化していることを示すものと考ええる。

4. 総合的考察

以上、アンケートの回答を総括して考察する。本キャンプは、学習指導要領の「生きる力」を特に意識したものではなかった。しかし、キャンプの趣旨は「生きる力」に十分通じるものであり、子どもたちはキャンプの中で4つの約束への取り組むことで、自然と「生きる力」が育まれていることがわかった。また保護者の期待は、スポーツの技術上達よりも、スポーツ以外の活動場面も含めた中で「生きる力」が育まれることに対しての期待が大きく、キャンプ後の子ども様子に変化を見出したいという親心も垣間見られた。

本キャンプの一番の特徴は、非日常の体験である。知名度の高い講師や初めて会う異年齢の友達集団、お兄さんお姉さんのような大学生と、スポーツ活動を題材に寝食を共にする体験は、小学生にとっては非常に刺激的な非日常場面の連続であるといえよう。

一方、小学生にとっての日常は、毎日続く学校生活である。同じ年の友達と、同じ先生の下で、同じ内容について学んでいく。このような生活は、じっくりと基礎、基本的な能力、技術を身につけるのに適した環境であるが、キャンプのような目新しさはない。

ここで、非日常と日常の相補的関係がという点から考えてみたい。子どもたちは日常の学校体験の中で、教科に関する様々な基礎を学びながらも、マナーを感じることは避けられない。そこで非日常のキャンプ

を体験すると、目新しいことに対する興味関心が満たされていく。保護者も、日常の学校教育で基礎基本を学ぶことに対する信頼があるからこそ、キャンプというあえて非日常的な状況の中では、学校教育の基礎基本を超えた応用力、つまり「生きる力」の育成に期待する。もし仮に1年中がキャンプの連続になってしまったら、目新しさはなくなるうえ、運動の基礎的技術を落ちついた環境で習得することはできなくなるであろう。

これは、日本古来の伝統的な世界観を示す「ハレ」と「ケ」の感覚に近いと考える。キャンプが非日常である「ハレ」に相当し、学校教育が日常である「ケ」に相当する。「ケ」は生活のリズムを作るが、連続すると変化がなく停滞し、マンネリ化する。そこでその連続を断ち切るような非日常である「ハレ」を経験することで、生命が活性化し、「ケ」も生きてくる。つまり、日常生活リズムである学校体育の「ケ」があるからこそ、キャンプという非日常体験の「ハレ」が生きてくるし、キャンプの「ハレ」があるからこそ、「ケ」である学校教育の存在価値が生きてくるのである。学校体育とキャンプが、それぞれの役割を担い、また互いに協力することによって、子どもたちの「生きる力」は着実に育まれる。これらは固い相補的關係にあるといえよう。

IV. まとめ

今回は、学習指導要領が掲げる中心的課題である「生きる力」の育成に対して、民間企業が実施する子ども向けキャンプが果たす可能性について検討した。本キャンプはスポーツ活動をテーマにした宿泊型集団活動であるが、キャンプを通して講師は「生きる力」の育成を目指し、子どもたちは4つの目標を通して意識せずとも「生きる力」を身につけようとし、保護者もスポーツ技術の上達ではなく「生きる力」の育成に期待をかけていることがわかった。さらに、非日常であるキャンプの長所は、日常の学校体育が基礎的な体力、技術向上という役割を果たしているからこそ生きてくるものであり、「生きる力」の育成のためには学校体育と宿泊型集団活動の相補的關係が必要であると結論付けた。今後、本事業のような民間企業の参入がますます広がることを期待する。

2012年度からは文部科学省、農林水産省、総務省の3省連携による「子ども農村漁村交流プロジェクト」がスタートする。これは、宿泊型集団活動が持つ「生

きる力」育成への可能性を、一部の子どもたちだけでなく、すべての子どもたちに機会として与えようとするものである。このプロジェクトが、子どもたちの「生きる力」を育成する大きなきっかけになることを期待したい。

引用・参考文献

- 中央教育審議会（1996）, 21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」
- 中央教育審議会（1997）, 「時代を担う自立した青少年の育成に向けて」
- 中央教育審議会（1998）, 「新しい時代を拓く心を育てるために」
- 中央教育審議会（2002）, 「子どもの体力向上のための総合的な方策について」
- 中央教育審議会（2007）, 「教育課程部会におけるこれまでの審議のまとめ」
- 中央教育審議会（2008）, 「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校学習指導要領の改善について」
- 国立教育政策研究所（2007）, 「諸外国における学校教育と児童生徒の資質・能力」
- 文部科学省（2008）, 「小学校学習指導要領 第2章第9節 体育」
- 文部科学省（2008）, 「小学校学習指導要領解説 体育編」, 東洋館出版社
- 文部科学省（2008）, 「小学校学習指導要領解説 特別活動編」, 東洋館出版社
- 文部科学省（2008）, 「体力・運動能力調査」
- 野沢巖・駒崎弘匡・上園竜之介・河野裕一（2008）, 「自然体験スクールが小中学生の「生きる力」に及ぼす影響」, 埼玉大学紀要教育学部, 57(1), pp.25-37.
- 岡本昌規・岩田昌太郎・東川安雄・房前浩二・藤本隆弘・高田光代・藤原宏美・合田大輔・牧野卓郎・石渡洋美（2002）, 「生きる力を育てる保健体育科指導の在り方」, 宇都宮大学附属中研究論集, 50, pp.62-71.
- 松岡重信（2004）, 「生きる力の育成をめざした体育授業」 広島大学学部・付属学校共同研究紀要, 32, pp.265-274.
- 大橋正春・長井健二・井上一生（2003）, 「小・中学生のキャンプ体験に関する研究（第2報）－新潟大学公開講座の事例から－」, 新潟大学教育人間科学部紀要, 6(1), pp.155-162.

- 社会人基礎力に関する研究会（2006）,「中間取りまとめ」
- 鈴木直樹（2007）,「小学校体育の授業改善の取り組みの現状とその方法の実態に関する報告－よりよい体育授業を目指して－」, 埼玉大学紀要教育学部, 56(1), pp.233-244.
- 橘直隆・平野吉直・関根章文（2003）,「長期キャンプが小中学生の生きる力に及ぼす影響」, 野外研究, 6(2), pp.1-12.
- 高橋健夫（2006）,「体育ミニマムとは何か」, 体育科教育, 54(2), pp.10-13.
- 谷口新一（2011）,「富山県内における小学生宿泊型自然体験活動へのニーズと満足度等に関する調査研究」, 富山国際大学現代社会学部紀要, 3, pp.179-197.
- 谷井淳一（2001）,「小・中学生の生活体験やキャンプ体験が主体的積極的行動傾向に与える影響」, 国立オリンピックセンター研究紀要, 創刊号, pp.21-33.
- 友添秀則（2009）,「体育の人間形成論」, 大修館書店